

(四) 今後の課題

○指導法を工夫しながらこの遊びを特定のこどもに続けていく。

○この特定のグループは園外で音楽的環境について個人差の著しい幼児で組織し、個々に比較調査をおこなう。

○ある期間の後にこのグループの幼児を

普通に保育された幼児との音楽に対する感じかたの比較をおこなう。

○この小研究に興味を持つ学生は、新年度よりいよいよ現場において個々に研究工夫し、定期的に連絡を持ち、一ケ年の後に一応の線を出してみようと思う。

(和歌山信愛女子短期大学)

自由遊びにおける社会性の発達

南 沢 志 げ

.....私の園の研究.....

乳児期はおとなの中に囲まれて生活し、周りの人々から多かれ少なかれ刺激をうけて、家族の愛情のつながりの中に社会性が育まれるが、三才頃になると積極的に友だ

ちを求める心が強くなり、社会性の芽生えがはっきり見られる。将来よい社会人として、円満な人格の基礎がつけられるこの大切な時期に、幼稚園ではどんな点に留意し

たらよいか。それには幼児の社会性はどのようなに発達していくものか、これを養うよい条件は何かを知らなくてはならない。自由遊びは自発的にグループがつけられ、自然の姿で友だちとの交りがなされるので自由遊びにおける社会性の発達について研究してみたいと思う。

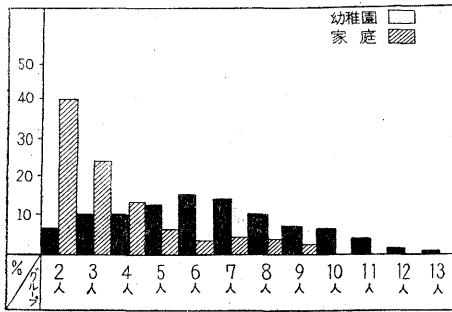
一、研究の方法

1. 対象は年長組(五才児)五二名、年少組(四才児)四八名計一〇〇名である。
2. 観察方法は幼稚園では、(a)遊びの種類および人数、(b)環境設定の関係、(c)人の行動などを記録し、家庭には、(a)園から帰ってからと、夏休み中の遊びと人数、(b)家族調査をお願いする。
3. 期間は五月から九月まで

二、研究の内容および結果

1. 保育プログラムの時間を記録して%を出したところ二七%が自由遊びである。この時間のしめる位置の大きいこ

グループ形成 幼稚園と家庭の比較



とがわかり自由遊びにおいてのみ記録することにした。

2.グループ行動を、独り遊び、傍観、平行遊び、集団遊びの四段階に分類し、年令別、男女別から考察してみると、年長組の独り遊びが一％に対して、年少組は三九％ 集団遊びは逆に、年長組が六七％に対して、年少組は約半分の二九％ありそれに、年少組の中には、

教師と一しよでないと遊べない子どもが一〇％みられることは、年令によって差のあることを示しており、男女別では、集団遊びで男子六一％ 女子三七％で、その差がはっきりしており、教師と一しよでないと遊べない子が女子だけに見られることから、男子の方が社会性が発達しているといえる。

3.グループ形成

遊びの中で自発的につくられたグループの人数を、幼稚園と家庭と比較してみると、表の如く家庭では二人が四〇％で一番多く、次が三人の二四％ 四人の一三％であるのに対して、園では六人が一五％で一番多く、他は分水嶺の状態となる。幼稚園が社会性の発達に大きな役割を果していることを示すものと思う。

4.家庭環境（兄弟関係）と幼稚園におけるグループ行動の関係は、年長組では

大差はみられないが、年少組の一人子と中間の子ともに注目される点がみられる。一人子の一人遊びが五〇％ 傍観と集団〇 平行遊び三四％ 教師と一しよ一六％

これらの点から、家庭で自己中心に過したと思える一人子は、園でも社会性がおくれていること、また中間児の一人遊び二四％ 傍観一三％ 集団五〇％を示すことから、やはり兄弟関係と社会性の発達は関係の深いことが知られる。

5.グループ形成の条件は、第一に共通の遊びをするためにつくられ、次は遊具を通してつくられる。集る仲間は、1、同年令 2、同性 3、性格が以てい
る 4、家が近所同志という似た傾向からの結びつきが最も自然である。特に目立つ点は、ほとんどの遊びに遊具が媒介していることである。

6. グループがこわれる原因、よいグルー

プ活動がされていると思うと間もなくこわれることがよくみられる。どんな

原因からか調査の結果、1、個々の興味が他に移る 2、一人二人の非社会的な行動 3、遊具のとり合い 4、

仲間同志の意見の衝突などである。

7. 遊具および教師との関係

遊具はグループ形成の条件に欠くことの出来ないものであることは前にも書きましたが、これを人数別に分類すると、四人までのグループは、小積木・まり・折紙・本・ねんどなどの小さい遊具が多くつかわれ、五人以上のグループで使われているものは、床上積木・ブランコ・砂場などの比較的大きなものがかわれている。また教師については、遊びの中に参加することにより傍観している子どもをグループの中に導入することを助け、発展しない遊び

に暗示を与えて行きづまりを解決し、

衝動的な遊びをしている時に建設的な遊びに展開させていくことが出来た。

しかし、あまり参加することが多いと、教師に依存するようになって、教師が入らないと遊べないというよう

な、悪い結果になることがあった。

三、結論として考えられることは

1. 幼児の社会的行動は時間的に短く、また衝動的で、グループが常に変つていくが、社会性の芽生えがたいへんに強いことがしられる。

2. 同年令の大勢の友だちの中に初めて入るところの、年少組の社会性の発達に正しい指導が特に大切である。そして、ホストな存在をつくらないように、また非社会性の強い子どもをつくらないように、話し合いとか、ごっこ遊びを通して、よい指導をするとよい。

3. 個々の生育歴 家庭環境を知り、その

子どもに適した方法で、社会へのつながりをもたせ、楽しい生活が出来るよう指導することが大切である。

4. 社会性をのぼす遊具を工夫する。出来上った既製の遊具のみでなく、子どもの遊びの中から見出して設定する。例えば大きな空箱、自動車の古タイヤ、

箱ブランコ（一〇人以上のれる）を用

意するとか、囲いのない砂場や、みかん箱に紙をはって一〇〇ぐらいおくなど、数にも研究が必要である。遊具の種類にもよるが、少し足りない位がよいと思う。 以上

足りない点のみ多く、ただ観察したものをざっとまとめた程度であるが、これを土台にして、更に社会性の指導へとすすめていきたいものと思う。

（長野旭幼稚園）